

着、日本からの引揚船待ちとなった。ナホトカ港の船つき場で海中をのぞいてみたら、二十センチくらいの魚や貝類が多く見られ、沿海州は良漁場のはずと話し合ったり、余裕が出てきた。

待ちに待っていた帰還船がつき、船上で思わず仲間達とバンザイを叫んだ。舞鶴港に近づき日本の風景、松と木々の青さを目にしたとき、よくぞ死なずに帰れたものだと思いがにじんだ。

帰国後三年ほどたつて体の異常で入院、結核性泌尿器系病氣と診断され手術を受けたが、シベリアで重症病棟に入れられ、そこで結核菌がうつり発病したのである。

シベリアの病院で世話になった軍医さんが青森県八戸市の方と教えてもらっていたので、平成五年五月、在ソ中の御礼を申し上げにお伺いしたら、既に亡くなっておられ、残念であった。御夫人に御礼を申し上げ、霊前にぬかづき御礼を念じ焼香し、仏前を辞した。

回顧

静岡県 松崎市 市郎

大正後半の生まれはまだまだ青年だなどと、擲揄ちやくともとれる言葉をつい最近まで聞いたが、光陰矢の如しと「齡」喜寿となり、震災子であります。お袋が、梁の下敷きになろうとしていたとき覆いかぶさってくれて私は難を免れたとか。

昭和七年（一九三二）一月、上海事変勃発。私の伯父は当時、高崎歩兵第十五連隊より出征（私の母は群馬県出身）。父親（埼玉県出身）と、沼津駅まで見送りに行った記憶がある。その伯父も事変拡大と共に戦死の報を受ける。

昭和八年十二月、皇太子殿下（今上陛下）御誕生、祝砲が揚がる。

昭和十年三月 大岡尋常高等小学校六年卒業

四月 静岡県立沼津商業学校入学

昭和十二年三月 同 二年修了

四月 埼玉県大宮町（当時）東京鉄道局

大宮工場技能者養成所入所

昭和十二年七月七日、蘆溝橋あしこうまわし事件起こる。朝、工場へ出勤、七時のラジオ放送で知る。当時客車は木製客車が大部分で、私は内部の塗装剝離作業中、入梅の湿気と剝離剤の臭いが入り混じり労働条件はよくなかった。これがきっかけとなり、いわゆる十五年戦争という長い暗黒の時代に突入していく。

昭和十四年五月、外蒙軍がハルハ河畔を不法越境したことに端を発し、ソ連軍と関東軍が衝突する事件があり、これがノモンハン事件である。その時、私の年齢は十六歳で、新聞報道等はノモンハンにて日本軍は大勝利を収めたと当時の国民は皆信じた。実はこの時、関東軍は地上戦闘において徹底的にソ連機械化部隊にたたかれたのである。この戦闘において日本軍将兵の一部はソ連の軍事捕虜となり、シベリア送りとなった者もあった。後年、小生もシベリア抑留中、その証言を得る。

昭和十六年十二月八日、「日本陸海軍部隊は西太平洋方面にて米英軍と戦闘状態に入れり」という第二次世界大戦への突入である。緒戦は華々しい戦果であったが、翌十七年のミッドウェー海戦以降は、奈落の底に引き込まれるようにして終戦を迎える。

徴兵検査

昭和十八年五月一日、二日、徴兵検査を受けるため、本籍地静岡岡県駿東郡大岡村日吉（当時の地名）より徴兵検査場、県立沼津中学校校庭において（現在の香陵グラウンド）甲種合格工兵ナンバー三の通知を受ける。集合地は広島東練兵場へ。

昭和十九年一月十七日 広島東練兵場集合

途中、瀬戸内海沿岸は軍事機密地帯のため、窓の鏡戸はすべて下ろす。車外の眺望不可。

一月二十日 広島出発、下関着、乗船

二十一日 下関出港、釜山着

朝鮮海峡航行中、護衛巡洋艦二隻がジクザグして航行する。輸送船を護衛していた。

二十二日 早朝、釜山出発

二十三日 鮮満国境凶門通過

この時、初年兵受領下士官(軍曹)は、「これより満州国に入る。お前達がこれから警備する国であるので心して警備するよう」云々、こんなようなことを言われた記憶がある。

二十三日 牡丹江經由興源鎮着

三月 一期の検閲(一選抜より漏る)

五月頃 黄色爆薬を梱包して戦車爆破訓練、日夜続く

九月 鞍山製鋼所模倣工場、満軍と共同して構築作業。この時期、B 29爆撃機鞍山上空に現れ、近郷一帯を爆撃。原住民等多数の死傷者を出す。この爆撃を機会に鞍山上空の防空施設強化される。

九月、十月、牡丹江甲山の秘密燃料貯蔵庫隧道作業(鞍山爆撃では三回空襲を受ける)

昭和二十年三月 牡丹江戦車第一連隊に転属。短期間ではあったが司馬遼太郎氏と起

居を共にする(当時見習士官)

六月 鉄道第十九連隊へ転属(千葉鉄四が移駐したのか?)

七月 通称東当線の撤収作戦。興凱湖は目と鼻の先にあり、ソ連の巡洋艦が遊泳していた。この鉄道撤収作戦は、大陸間横断鉄道の始期の段階ではなかったか。推測であるが、東南アジア海域の海上輸送が制海権を握られ、輸送困難であったからと思う。(不確実な記事)

鉄道撤収後、雨にうたれたためか熱発気味で、体温三十八度くらいで食欲等なし。医務室に入室を許され療養の日々が続いた。忘れもしない八月九日、午前零時ごろ、なぜかその日は寝台の上に正座をしておった記憶がある。その時である。医務室東北に当たる方面からごう音というか、戦車砲の発射音が腹の底に響きわたった。ソ連の参戦である。虎林、虎頭方面から侵入して来た模様であり、直ちに健兵は非常召集されて

満ノ国境に出動、衆寡敵せず殲滅の憂き目に遭うのである。その後、全滿各地でソ連地上部隊と機械化部隊が蹂躪をほしにまにした。

一番悲惨な目を見たのは在滿邦人とその家族ではなかっただろうか。我々陸軍部隊はトラック、鉄道等を優先利用し、後方警備という名目で我先にと後退をしていく。邦人達は徒歩で国境方面から何日もかかって牡丹江近くまで来ても、誰一人として救援の手など差し伸べる者もなかった。婦人は髪を短く切り、顔には炭など塗って変装して、線路伝いに夢遊病者のように黙々と南下していった。一方、兵士達は貨車トラックに乗せられ横道河子まで来て、それ以北は鉄道が爆破されたので徒歩で一面波まで来て見ると、おそらく広範囲な地域から来たのであろう各部隊で大混乱。特に目についたのは、参謀肩章をつけて昨日までは全軍を叱咤した将校が、軍刀を杖にして放心状態のように歩いていくことだ。

開戦二、三日後のことと思うが、我々も牡丹江郊外に擬装網を四方に張りめぐらし、野砲一門（提供部隊

不明）設置、応戦の構えをするのであるが、超低空でソ連の爆撃機が機銃掃射をしかけて来た。あまりにも低いので顔形、服装までが確認できた。また、牡丹江街道をソ連戦車T三四が天蓋を開け、射手が身を乗り出して、マンドリン銃を構えて何十両となく縦隊して南下する。

国境を越えたソ連は、満州国内の鉄道レールの軌間（レールの幅）の修復に取りかかった。それは、満州国の軌間とソ連の軌間では、ソ連の方がだいぶ広いのである。それを女兵士（初めて見た）が犬釘抜きで軌間を広げ、ソ連の列車が満州を自由に通れるようになるのである。八月の炎天下、上半身裸である。

武装解除

一面波で武装解除を受けた各部隊は、一千人単位ぐらいたいの大隊編成となり、隊長は鉄十九の布施少佐、通訳はロシア語学校（ハルビン）出身の徳永という者ではなかったかなと記憶している。編成が完了すると今度は牡丹江方面に逆戻り。着いた所は海林の第八八九部隊の営庭である。この部隊は九二二部隊の前身の部

隊である。

シベリア抑留の話に入る前に、私達の部隊を少々紹介いたします。「特殊機甲工兵部隊 独立工兵第十二連隊」これが正式な名称。この部隊には伐開機、伐掃機という無線操縦もできる戦闘用の戦車を大幅に改良し、亀の子のような砲塔もない。ただし、前部は三角形の突出した鋭利な刃物のような物がある。

伐開車は、仮想敵国ソ連国境の白樺原生林（直径二十センチないし三十センチくらいの白樺）をなぎ倒し前進する。伐掃車は後方より、なぎ倒した木材等を整理する（道路整備等）。後方部隊の前進作戦を容易にさせるためである。伐開機は起重機、電動鋸、斧その他、各部品を多数搭載してあったが記憶になし。

この伐開機、伐掃機を南方戦線において活用しようと考えた関東軍は実戦に用いたが、南方の原生林は北満の原生林よりは遙かに大木のため、物の用には役立たなかったようである。南方戦線より帰還途中、敵潜水艦の攻撃を受け撃沈をされた生き残りの四年兵、五年兵の猛者の証言である。気性の荒さでは内務班長も

一目置いていた。

我が兵舎も仮兵舎のため内務班の仕切りがなく、一中隊より四中隊が一目瞭然と見渡せる。前述の古兵の中で我々初年兵は終日鍛えられたのである。我が部隊のことをもう少し書きたいが、紙数の関係でここまでとします。

話を海林宮庭に戻そう。

一千人単位の大隊は、隊長は鉄十九連隊の布施少佐、通訳はハルビンロシア語学校卒業の徳永某。隊長と通訳はカマンジール（最高責任者）より訓示を受ける。「帰国させたいのであるが、船舶が不足のためもう少し辛抱して」と通訳は言う。この言葉を我々は最後まで信じた。二班に分かれた要員は、片方は糧秣の積みおろし、片方は幕舎の設営要員で、その作業が九月の末まで続いたような気がする。九月末ごろ大隊長より「帰国のためにこれより準備せよ」との話があまり突然のことであつたので欣喜雀躍、表現のしようもなかった。二、三日後、満ソ国境、綏芥河の鉄橋を渡り貨車は北上を始める。この時点でもまだ帰国という

意識はあった。国境を越えてから列車の速度は誠に遅い。線路の整備が全然されていない。そのうち、誰言うとなく、ハバロフスクはもうじきだと言う者がいた。ハバロフスクは、小学校時代、ロシア極東第一の都市ということを教科書で習っていたので、あの欣喜雀躍から余落の底に突き落とされた気持ちで、あのとときのことは今でも忘れようとしても忘れられない。ダメージは大きかったが気を取り直すのに必死であった。

貨車の内部の様子を書いてみると、貨車の隅の床に五十センチメートル四方くらいに穴を開けてある。排泄用の穴である。小便の方は、一斗缶くらいの缶を半分にしたお粗末なものである。もちろん外からは施錠され扉の開閉は不可能であり、その中に何人くらい詰められたか。五、六十人くらいであったらどうか。用便を催し場所を離れると、戻る場所も見当たらない状態である。したがって中の空気も臭気充満し、衛生状態は最悪であった。光のない貨車の生活で、ハバロフスクを通過するときは極東第一の都市を誇るだけあつ

て、周囲は大変明るかったようである。

ハバロフスクからどのくらい東に走ったか。後で分かったことであるが、機関車の燃料は薪であった。途中でときどき止まったり、薪を補充したり、速度は違ったが、一週間も乗っていれば結構な距離である。止まってから一週間くらい徒歩である。昼夜兼行というか、まさにその通りで、設営の記憶がないので、さきの大戦時の囚人のラーゲルではないかと思う。

シベリア抑留

列車の終点はハバロフスク西方（コムソモリスクとの中間くらい）何キロの地点であるか不明であるが、十月も半ば過ぎると気温も相当下がる。服装は軍隊のラシャ（冬用）であったが身に応える。

第一收容所まで一週間くらい要したが、寒さと空腹で落伍者もだいぶ出た模様である。夜間、空腹に耐えられず、ジャガイモが結構落ちていたので拾って、ラーゲリ（收容所）まで大事に持って行くと、凍っていたジャガイモは実は馬糞であり大騒ぎとなる。我々が来た道路をUSAのマークの入った大型トラック

が、糧秣あるいはジャガイモ等、輸送の行き交う光景を見る（アメリカとの武器貸与協定か）。第一收容所に到着したのは昭和二十年十一月二日の夕方である。

冷えびえとした室内をそれでも皆が整理をし、薪も遠出できないので近くのをかき集め、暖をとる手配をする。夜中、マンドリン銃の銃声が響きわたった。明けて十一月三日は明治節、全員広場に集合して皇居遙拝をし、昨夜の一件につき、ひそひそ話。その中から判明したことは、逃亡者一人が射殺されたとのこと。

この收容所は周囲を防雪林に囲まれ、本屋、炊事場、医務室らしき小さな建屋等あり、今までの收容所よりは大きいような感じを受ける。

これより本格的な抑留生活に入るのであるが、作業によるノルマ、作業量一日の基準量を一〇〇%とするならば黒パン三五〇グラム、スूप一〇〇グラム、穀物一五〇グラムと仮定すれば、それを上回ればその定量を上回り、一〇〇%に達しなければ下回る。簡単なようであるが、その職種が何十何百と細分化され、複雑怪奇そのものであり、ロシアの担当者も頭を悩まし

たようである。このシベリア鉄道は独ノ戦中撤去して欧州戦線に利用。戦後はバム鉄道（第二シベリア鉄道）として建設計画を実施したのではないか。まず路盤工事は、山肌を削り、ターチカという手押し一輪車で、それに鉄輪を付けた簡単なものである。走る道は、白樺を幅三十センチ、長さ二、三十メートルくらいの板を敷き、その上を行き交うのである。それを山肌を削って何杯、作業現場まで何往復できるか、それがノルマとして計算されるのである。また山肌を削って、土を何立方メートル出したか、それらもすべてノルマである。また枕木等は白樺を伐採し、どのくらい枕木として使用できたか、事細かい計算がなされるのである。このノルマによって抑留生活三年の間、一日たりといえども気の休まった日はなかった。たまたま一〇〇%以上ノルマを達成した場合、百二十ルーブル支払われたこともあった。ただの一回である。

我々は本来定住を知らない。鉄道が徐々に延長されると、それとともに移動しなければならぬ。大体四、五キロメートル間隔に幕舎あるいは囚人の收容所等

を利用していたのはそのためである。

昭和二十一年の年末頃より昭和二十二年頃にかけて、徐々にではあるが周囲の環境も改善された。シベリアの気候は春夏一遍に来る感じで、山いちご、山百合、その他名の知れない草花が一気に開花、いっときめのなごむ季節である。その年の暮れだと思いが、初めに少し書いたノモンハン抑留者のことであるが、我々が作業を終え帰路につき途中で行き交った抑留者が、最近ハバロフスクで日本人捕虜を見かけた。その捕虜はハバロフスクへ捕虜交換協定で連行された。ただそれだけでは気づかなかったが、電信柱の上部にて電線工事中、日本の子守歌等を口ずさんでおったとのこと。私達も大いに驚いた次第であります。

路盤が構築され、枕木が敷かれると、レール運搬車にてレールを運んで来る。このレールは満州のよりも重量があり長大なものである。以前、ドイツ人捕虜が作業しているところを見たが、レールが枕木の上に乗ると犬釘を打ち込み、その動作は鮮やかなものであったが、今の我々にはそのような力はない。釘が最後ま

で打ち込めない（頭が少し浮いている）。機関車が通るとレールが上下に移動し、曲線ではレールの幅が広がる恐れがあるのである。脱線の可能性もある。今まではそんなことがあると、真冬には小便をかけてごまかしておった。これがなかなかのアイデアであり、零下三〇度くらいになると完全に凍りつき、重量物が通ってもびくともしなかった。気温が上がってくると氷も溶け、また元の状態に戻ってしまうのである。そんなところを運悪く指摘されたのである。白い顔を真っ赤にして「ヨッポイマーチ ニイハラシヨ」と罵詈雑言である。後の手直しがまた大変。一日三五〇グラム黒パンと水のような少々塩気のあるスープ。その中にジャガイモの一かけらくらい入っていれば、大騒ぎである。こんな食料では死者が出るのも無理はない。「枕木一本、死者一人」と言われたようであるが、それもうなずける。この鉄道の終点はコムソモリスクだと記憶しているが、我々の大隊は途中までで、この作業を他の大隊と交代した。

鉄道作業の中でドイツ人捕虜と話をする機会があっ

た。もちろん、言葉が通じないので身振り手振り、片言のロシア語を交えて。「ヤボンスキーは独ソが欧州で戦っているとき、あの強大な武力をもって一押しすればロシアに勝って、我々ドイツ人も日本人もこんな苦勞しなくて済んだのだよ」と、こんなことを身振り手振りで話をしたことを記憶している。多分、関東軍特別大演習を指しているであろう。

この時分であつたと思うが、百パーセント以上ノルマ達成で、百二十ルーブルの報酬をもらう。そのようなことを続けると反動として必ず四級（オカ）となる。この級別の認定は大変簡単なもので、ロシアの軍医は大方女医さんである。抑留者は一人一人、女医の前へ一糸まとわぬ全裸にて進み、背中を向けると、大臀筋の肉を引っ張り、肉の厚みによって等級が決められるのである。羞恥心も何も無感覺である。

先ほどの小便の件であるが、故国日本へ無事帰れるまで、とにかくどんなに叱咤を受けても体力の温存に努めて辛抱しなければだめだと隊長がよく言われた。例えば道路の雪かき作業でも、雪の深いところではス

コップを直角に入れるのではなくスコップを右半分、次に左半分、それによって一日中道路整備する抑留者は随分体力的には温存されたのではないかと思う。それでも慢性的飢餓で、我々は三五〇グラムの黒パンは朝一回で全部食べるので、昼は本当に飯盒の中盒七分目ぐらいに少々塩味のついた高粱スープ一杯で終わりである（嘘でも何でもない）。休憩時間が来て焚火で暖をとる抑留者。片方では、少し離れたところでロシアのカンポイが大きな黒パンを食し、スープ等を食す。スープのいい臭いで、今食したばかりでも腹の虫が鳴くようだ。正に飢餓以下である。警備兵が場所を移動する。衆人がすべて注目する。そこにはパンの切れはし、タバコの吸い差し、スープを捨てて色のついた仄かな香りの雪の塊……。これ以上筆を進めることはよそう。

道路工事は決まって真冬の作業である。道路が滑ったりしてトラックなどは危険なためではないのか？朝七時の点呼。まだ薄暗い。カンポイは千人単位の抑留者を五列に並ばせ、紙にいちいちメモして人員を

確認するのである（五列でない」と計算できない）。時間がかかるから、立ちん坊の抑留者は足のつま先からひしひしと寒さはい上ってくるような感じである。道路整備は近くからだんだんと遠くなる。現場に着くのは十時ごろ。防寒帽、防寒外套、身に覚えがない寒さである。

太陽は頭の上あたりだが、大隊がぼーっとして見える空気がキラキラと輝いて見える。身体全体がおかしい。そのときカンボーイは顔色を変えて「作業終了。早く収容所へ行って休め」と。「ラボータカンチャイ ヴイストラ スパーチ」こんなようなロシア語だったか。零下五〇度を超えて捕虜に事故があった場合、ロシア上層部による処置が及ぶと聞いたことがある。それが一回のみならず二回もあったのである。一回目は不問に付されたが、二回目は何らかの処置がされた模様である。零下五〇度というと、カムチャツカの対岸にマガダンという都市があるが、極寒（マローズ）は冬季中は四六時中、現れるとのことである。

私のシベリア抑留期間は約三カ年、それを三期に分

けてみると、昭和二十一年、二十二年、二十三年と分けられる。

昭和二十一年はシベリア三大悪（極寒・飢餓・重労働）、私はこんなように位置づけている。この三つが拒絶反応を起こし、生死の境を翻弄させられたのではないだろうか。

昭和二十二年は、慢性的な飢餓は解決とまでいかず重労働には変わりはないが、除雪の円びの使い方も一遍に円びを突き刺すのではなく、片方に半分力を入れてからもう半分に力を入れて雪を放り出し、体力を保持して帰国に備える。

この時期、幣制改革があったのではないかと思う。多分二月か三月頃だったか、記憶ははっきりしない。前述したが、百二十ルーブル、報酬として受け取る。簡単に言うと、物価が十分の一に下がったということです。私はその金はすべてマホルカという煙草に化けた。私の周りにロシアの囚人がいて、今日、コムソモリスクに用事があるから煙草買ってきてやると言うので十ルーブル渡す。コップ一杯十ルーブルとのことだ

が、手元に来るのは半分くらいで、後はピンハネである。私は、地方人との接触がなかったので本当にロシア語が苦手であり、また物を売買するような所もなし、物品の値段は皆目分からなかった。

昭和二十三年に入るとぼつぼつ周囲の環境も整ったが、私の記憶では今までどおり門前に整列し、点呼を受け、前後にカンボーイがマンドリン銃を肩から吊るし、何かあると「ダワイ ヴィストレ（早く行け）」と大声を上げ現場まで強硬に連れていかれた。それがある日突然、距離の短い作業現場までならカンボーイなし。日本人の責任者が一人つけば、悠々と営門を出入りできるようになった。この時分から、特定の連中のところではダモイの噂等あったのではないかと推測される。

昭和十四年五月、外蒙軍が西岸から東岸へたまたま越境。それがノモンハン事件の原因である。捕虜交換協定により、日本将兵何人または何十人かわからないが、シベリア送りとなり、そこで捕虜生活を送っていたことになる。一番若い兵隊は年齢二十一、二歳くら

いであり、ハバロフスク近辺の収容所生活をしているとすれば当時二十七、八歳くらいであろう。現在ならば八十三、四歳くらいで、その人達は今健在か、さもなければ鬼籍の人か、気になるところである。

ノモンハン事件に関連して現在に戻るが、去年の六月、沼津朝日という地方紙に、ある大学の先生が事件の研究者として某氏と知り合った。その某氏はノモンハン事件の著書を多く出版していて、合同で講演会を予定していたが、某氏体調不良のため講演会を断念したという記事があった。もし私が実際にその日本人捕虜と直接会話を交わしていたら私も積極的な協力を借しまなかつたかもしれない。私も大いに関心があるのである。捕虜交換協定により何人くらいずつを交換したのか、どのようにしてシベリアまで行ったのか、また日ソ両軍の死闘の様態等、気になるところである。このノモンハンの描写については五味川純平氏の「虚構 関東軍」（沼津図書館 最近は見当たらず）に詳細に記述されている。

話を昭和二十二年ごろに戻す。環境も少しずつ改善

の方向に向かっている。気温が高まると相撲大会を開催した。相撲は腰に全然力が入らず、初戦で敗退。炊事関係の兵隊は強かった。それと関連して歴代横綱の名前を、初代明石より双葉山まで逐次書いて投票箱に入れる。開票したら、なんと私が一番正確に記入したということ、夢にも思わなかった一等になったのである。賞品は驚くなかれ、黒パン五キログラムである。それを手にしたときの喜びは筆舌に尽くしがたし。後生大事に持って帰り、誰も見ていないのを確かめて机の下にしまう。しかし、普通のパンが三五〇グラムなのに比べると余りにも大きいので、馥郁たる香りが隣のM兵長の方まで漂う。名前も顔も今でも思い出すが、そのM兵長、どこが悪いか、一日として作業に出ない練兵休である。二、三日後、作業を終わって帰って見ると、あの大きな黒パンが跡形もなくなくなっていたではないか。大騒ぎをしても、皆腹を減らしているのだ。同情してくれる人は誰もいない。ただ、ねたみを買うだけだと思つて一言も喋らない。その兵長は旬日を経ず牡丹江の病院へ入院したとのこ

と。病名等知るよしもなし。誠に口惜しいことであつた。

昭和二十三年春ごろより（シベリアはいつごろから春と言うのか）営門の出入りも緩やかになり、シベリアの雪原、原野が嘘のように見渡す限り青々とし、いつとき捕虜の感覚を忘れる。そんなときに山百合の群生した白一色の花畑、また山いちごが見渡す限り赤い実をつけている、どうぞお取り下さいと言わんばかりに。山百合の根は焼くかゆでる。山いちごは飯盒一杯くらいにして収容所へ持つていく。器用な奴がいて何かに加工したようだ。また、こんなのもあつた。収容所から少し遠くなるが、ネギとニラのあいのこのような野草が、これも見渡す限り群生している。それを二束、三束、ロシアの地方人の家庭に持つて行くと、喜んで黒パン相当量と交換してくれた。

私のシベリア抑留三年間

ハバロフスクイコムソモリスク間約五〇〇キロメートル、その中間二五〇キロメートルくらいが私達の作業範囲ではなかつただろうか。その路盤構築は、前述

のようにターチカという一輪車で何百、何千という押留者が土砂運搬に従事。路盤を盛り上げ、固めて、その上に枕木を置いて行くのである。こんなことは至極当たり前であるが、シベリアではなかなかそうではなかった。白樺の自生している所は大体湿地で凹地であり、路盤の通っている所は一段と高い所である。白樺の伐採は冬季でないと不可能である。

夏季になると湿地帯は水浸しとなり、白樺は水の含有が多く伐採不能となる。枕木に適した木の直径は二五センチくらいかと思われる。日本の軌間が一四三・五センチで、レールの外側に出る枕木の長さは三〇〜四〇センチメートルくらいか、そうすれば日本の鉄道の枕木の長さは概ね分かる。当てずっぽうで申し訳ない。したがって、ソ連の軌間の幅が何ミリかわければ長さもわかるが、相当長く重量物である。

路盤までの斜度二五度〜三〇度ぐらいの坂道を運搬途中、枕木を落下させ、それを受けるために右手で受けようとして薬指裂傷というのか、患部が紫色にはれ上がり痛みを覚えたが、この辺は誠に曖昧模糊として

記憶がはっきりしないのである。医務室に行つて治療した覚えもないし、作業を休んだ記憶はさらになし。今でも右手薬指を見ると当時を思い出す。帰国後しばらくは指が曲がらなかった。

シベリア三大悪（飢餓・重労働・極寒）、この三つのうちどれか一つでも欠ければ、六万とも七万ともいわれる死者は出なかつたであろう。ロシアそのもの（シベリア）の緯度の関係でやむを得ないにしても、労働と食糧関係は人間がやることであるから、改善しようと思えばできたのではないか。ノルマ、ノルマと言つて擽る。糧秣も軍隊の階級組織を利用して上層部が横流し。ロシアはロシアで似たりよつたりのようなことをしていた。「国際捕虜給養規程」とうたった内容も詳細に記された看板が、収容所内の食堂の入口に掲載されているのを目撃したこともある。これらは、各国の「国際監視団」等の役人が見字に来たときの看板だったのでなかったか？

ソ連が進駐後第一に手をつけたのは軌間、レールの幅の修復である。それは、全滿各地の産業施設、資材

の接取等々をするためである。私が一番関心があったのは、部隊の周囲には必ず相当大きな三角状の小山のような物体である。後で聞いた話であるが、その中には数年間、いかなる非常時の場合でも糧秣・被服・甘味品・日用雑貨等を擬装し、隠匿しておいたということとを聞いたことがある（貨物庫ではないか）。

今考えると、昭和二十三年の六、七月ごろか、警備体制が緩やかになった。八月に入ると噂が噂を呼び、周囲がだいぶ騒がしくなる。でもまだ半信半疑。今までだいぶだまされた。正確に帰国の伝達を聞いたことがない。多分山の斜面を削りターチカで運搬していた時分か。記憶がどうしても呼び戻せない。あやふやな記憶の中から、満人の着る新品の服（黒色）、襦袢、袴下等が支給されたことがかすかな記憶にある。そんなことがあって二、三日後に、帰国の貨車ではなく客車の手配されて来た。背もたれもあり、すし詰めめ貨車よりは乗り心地がよい。雑糞一つ、缶詰の缶二つ三つくらい身軽さ。命令から一時間もあればすべて終了。我が大隊の帰国者は八〇〇〜一〇〇〇人くらいで

あったか。乗車場所はどこかとただざれば、ハバロフスキー・コムソリスクの間くらいとしか言いようがない。

速度は大変違う。それでも、ジャガイモ畑を一週間見続けていると飽きる。また小麦畑もそうだ。ソ連という国は本当に広大な国だとつくづく思った。シベリア抑留三年、第一収容所に着いたその夜脱走を企て射殺された者一人。それ以外に栄養失調、結核等で入院した者もあったようだが、死亡したという話は聞かない。

列車が、ハバロフスク通過のときはしげしげと車窓より見たが、二、三の高層建築があった程度である。それから列車はナホトカへ向かって南下するが、ナホトカまで何日かかったか覚えなし。距離にして七〇〇〜八〇〇キロメートルくらいではないか。ナホトカへ到着したとき一番最初に目に入ったのは、緩やかな小高い丘が二、三あったことだ。そこには皆、幕舎を無数に張り、赤旗を林立させ、「インターナショナル（革命歌）」を高歌放唱する部隊あり、異常な状態で

あった。何かアクチーブ（活動家）あたりより、持ち物検査、抑留中の印象等の質問があったような記憶あり。また驚いたのは、私の近くへ寄って来て、私が静岡県出身者と知ってか知らずか、「私は山本某と申しますが、静岡市駒形に父親と家族が一人おります、伝言を頼みたい」とのこと。なぜ残るのかと聞くと、その山本某氏は「あと二、三年残って民主運動のために尽くしたい」と言明した。民主活動家の尋問も無事終わり、これから乗船となる。待ちに待った帰国。夢の中をさまよっているようなり。

乗船上の注意、乗船後の注意、周囲が喧騒でよく聞こえず。船内の様子も定かならず。覚えてるのは一番下の船底あたりであった。そのとき布団代わりに床に敷いたのがあの満服一枚であった。船内の出来事等については曖昧な記憶のため省略させていただきます。

ナホトカ出発より二泊三日で舞鶴に到着。本当に感慨無量である。タラップを降りる。八月の午後の日差しがまぶしいくらいに光り輝き、イモづるの緑の葉つ

ばが眼前いっぱい広がる。不思議に自然と目頭が熱くなるのを覚えた。ほかのことは忘れても、このときの情景は今もって忘れない。

引揚收容所には三日か四日くらいいたのか、DDTの消毒、風呂、援護局職員の身上調査等すべて終了し、帰還手当なるもの九百円也を受領し、八月二十三日舞鶴駅を出発、京都經由にて沼津駅に到着。足が地についていないほど感激した。

沼津に下車した者、私を入れて三人。二人の者は伊豆方面の人達なり（名前を聞いておけばよかった）。後日再会を約したが、名前住所も不明のため実現せず。

ナホトカでの山本某君については、帰国後幾日かを経て静岡市駒形の実家を訪問（父親、当時六十歳くらい）し、事情説明したるも父親の反応余りなく拍子抜けした記憶がある。この労苦調査の手記を書くに当たり半世紀以上の記憶がいかに不正確であるか、自分でも不思議でならない。

ノモンハン事件捕虜交換協定により、日本将兵の何

人かが昭和十四年より昭和二十年までの六年間、事故もなく生活した事実我感到した。事件当時、現役兵であるならば、今八十三歳か四歳であるその人達はどうなったのか。静岡県静岡市の山本某氏。向こうで幸せな結婚をしたか、さもなければ日本へ帰国したか、これも気になるところである。気になるついでに、抑留途中シベリアの列車が長時間停車、大小の用便途中何の前ぶれもなく発車、取り残された兵士はどうなったのか。零下三〇、四〇度では生存の見込みは絶無であろう。シベリア抑留途中では、このような状況が随所に見られた。

枚数も最後に近づいたが、まとまりのない記憶が去来するので少々記してみる。

ソ連が日ソ不可侵条約を一方的に破棄し、満州に侵入したのが八月九日零時。そのとき健兵（健康な将兵）は非常呼集を受け、直ちに戦闘態勢に入った。出動した場所は牡丹江省穆稜原興源村。ここは私が一番最初に入営した部隊である。話は少し横にそれるが、昭和十九年の中旬ごろ、東寧戦車一連隊と牡丹江戦車

連隊が合同大演習を実施した地点である。奇しくもここが戦場となろうとは。平坦地は丁三四戦車のなすがままに蹂躪じゅうりふされるから、我が戦友将兵は山岳地帯に避難、戦機をうかがう。部隊史によれば、独工十二連隊は第五軍隷下第二百二十四師団にあり、その他十個師団くらいであった。穆稜地区の激戦の様子は、「虚構関東軍」（五味川純平氏）の本に詳細に描写されている。私の部隊についても余分なことを書いたようであるが、私の戦友小山上等兵はどこから情報を得るのか。終戦前、八月六日に広島に原爆が投下されたので日本の敗戦は決定的だ。原爆を「マツチ箱くらしい強力な爆弾」と表現していた。当時そのような情報が広言されるならば大問題を惹起したであろう。

私の部隊でありましたので余分なことも書きましたが、その点をご容赦下さい。また、作文の経験のない私がこんな長文を認めることができたのは、私の人生にとっても有意義であったと思う。何といっても半世紀以上前の出来事、記憶がいまいであり、忘れていく部分がたくさんあり大変見苦しい文であります、

ご勘弁願います。

ソ満国境最前線、穆陵地区に出勤した我が部隊将兵は、劣悪な条件にもかかわらず、ソ連軍南下を一時的にも阻止し、死傷したる将兵に対して深甚の敬意を表し、筆をおく。

平成十二年七月十三日

抑留記

滋賀県 池田 泰三

大正十三（一九二四）年七月二日、彦根市連着町で生まれた。

滋賀県立彦根工業学校染色科卒業、京都丸紅に就職。

昭和十九（一九四四）年十月一日に青森県弘前^{しちよう}自動車隊に入営。地下足袋に巻脚絆に竹水筒、注射。

一週間して満州山神府入隊。弟、十月十五日に予科練岡崎海軍航空隊に入隊通知。父親は舞鶴に徴用されて

いた。家は妹と叔母がいた。

山神府で初年兵教育を受けて乙幹に任命。黒河、山神府より弾薬南下輸送途中、チチハル三十キロ手前、日ソ開戦。チチハルにて武装解除。

ハイラルでの戦場掃除という司令部よりの通知でジャラン屯より上下二段有蓋貨車に乗せられ、チョスイ（時計）の身体検査を受け、バイカル湖を過ぎ、クラスノヤルスク第一收容所。小川少佐以下一五〇〇人。クラスノヤルスクには三十二の工場がある。第八機関車工場に就労、ドイツ製四メートルもある機械三台を一人で操作。機関車の側壁四センチの鉄板を七枚切り、磨く、スロッターミリーリングを操作。最初は見習い十二人が付いていたが二人になった。ノルマは食堂に張り出され、一二〇%、ハラシヨラポータ。一棟に約四〇人入っていた。食事はチチハルから經理少尉が味噌樽をハチミツ樽と間違えて積んだので、毎朝蓋に少しはちみつがついた食パン一枚に、キャベツが二、三枚浮いていた。尻には虎のような斑点ができて栄養失調になっていた。靴はないので下駄、今のつつ